

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370104

研究課題名(和文)「ジプシー音楽＝ハンガリー音楽」という19世紀的通念の形成をめぐる包括的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of the the 19th-Century Concept of "Gypsy Music" as "Hungarian Music"

研究代表者

太田 峰夫 (Ota, Mineo)

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：00533952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：二重君主国時代の「ジプシー楽団」の演奏活動について資料を集め、リストやヨアヒムのような藝術音楽の作曲家やヴィルトゥオーソ(名人)の肯定的な「ジプシー音楽」観が結果的に「ジプシー音楽＝ハンガリー音楽」という通念の定着に寄与したことを明らかにした。また、20世紀初頭の音源を比較することで、当時の「ジプシー音楽」の演奏スタイルが同時代のヴィルトゥオーソ達にも一定程度の影響を与えていたことをつきとめた。これらの知見に基づき、2016年6月にボストンの学会でヨアヒムと「ジプシー音楽」の関係について発表したほか、リストの「ジプシー音楽」観に関する研究においても学んだ知見を活かすことができた。

研究成果の概要(英文)：A survey of the activities of Romani musicians revealed that favorable comments of representative composers and virtuosi (such as Liszt and Joachim) on this music played an important role in the formation of the 19th-century concept of "Gypsy music" as "Hungarian music". Furthermore, Romani musicians could have influenced virtuosi of art music of the day as a comparative study of early recordings made by "Gypsy musicians" and those by violin virtuosi. These findings resulted in several papers, especially in the one on the relationship between Joseph Joachim and Romani musicians, which was read at the international conference in 2016, and in another on Liszt's views of "Gypsy music".

研究分野：美学・芸術諸学

キーワード：ハンガリー音楽 ナショナリズム ジプシー音楽 ヴァイオリン ツィンバロム リスト・フェレンツ
ヨーゼフ・ヨアヒム 二重君主国

1. 研究開始当初の背景

19世紀のハンガリー中間層(とりわけ「ジェントリ層」と呼ばれる没落貴族層)の人々は、自分達の間で流行していたハンガリー語の歌謡曲を好んでロマの楽師達に教え、楽器で演奏させた。楽師達によって独特な装飾をほどこされたこの器楽音楽は、「ジプシー音楽」ないし「国民音楽」という呼び名で親しまれ、とりわけ1860年代以降、「ジェントリ層」の生活様式のシンボルとして、ハンガリーの文化アイデンティティにとっての大きなよりどころとなる。「ジプシー音楽」研究の権威であるシャーロシの著書(Sárosi, Bálint. *A cigányzene...* (Budapest: Gondolat, 1971))からも明らかのように、以上のことはハンガリーの音楽史研究においてすでに定説となっている。

本研究課題の申請者も、この定説自体に対してとくに異論があるわけではない。ただ、先行研究において「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」という通念の形成にハンガリー国内の人々がどのように関わったかという点について本格的な言説研究はいまだ存在せず、ハンガリー国外の人々が果たした役割に至っては、注意が払われる機会がほとんどないことに、申請者はこれまで一抹の居心地の悪さを感じてきた。そこで申請者は本研究課題において、言説のレベルにおいてハンガリー国外において「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」という通念がどのように形成され、かつそれがどのように美的に価値付けられたかを明らかにする一方、そうした評価が国内における同様の通念の形成にどのように関係したのかを解明することにした。

2. 研究の目的

19世紀後半のハンガリー社会において「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」という通念が共有されていたことはよく指摘される。その際、ハンガリー音楽史の文脈では、このような通念を作り出したのがあたかもハンガリー人達自身であるように語られがちだが、実際は国外においてすでに通用していた通念をハンガリー人達があらためて受け入れ、内面化していった一面もあったのではないか。本研究ではその点を、このトピックをめぐる当時の言説を研究することで検証する。そうすることで、「ジプシー音楽」に対するハンガリー内外の人々の見方の間にこの時代、いかなる関係性が存在しえたかを解明するのが、本研究のねらいである。

3. 研究の方法

様式的に見て「ジプシー音楽」が西洋芸術音楽、ないしフランツ・リストの音楽にどのように取り込まれているかというテーマについてであれば、すぐれた研究は既にいくつか存在する(e.g. Loya, Shay. *Liszt's Transcultural Modernism and Hungarian-Gypsy Tradition* (Rochester: University of Rochester Press, 2011))。そのような先行研究との差異化をはかるために、本研究ではこれまで手薄だった言説研究に力を入れる。まずは中心的なトピックとして、フランツ・リストの著書『ジプシーとハンガリーにおける彼らの音楽』(フランス語原著は1859年、ハンガリー語訳は1861年)の西欧諸国とハンガリーにおける受容の歴史を取り上げ、「ジプシー音楽」についての

当時のハンガリーにおける言説が西欧のロマン主義の文脈で語られていたこととどのように関連していたのかを考察する。その一方、《ハンガリー狂詩曲》をはじめとするリストの一連の「ジプシー風」作品のハンガリーにおける受容史についても調べる。リストとハンガリーとの関係を扱ったレガーニの二巻本 (Legány, Dezső. *Ferenc Liszt and His Country 1869-1873/1874-1886* (Budapest: Corvina, 1983/1992)) をはじめ、リスト研究にはすぐれた先行研究が多いので、それらの研究成果を十分にふまえて、最終的にはリストの「ジプシー音楽」観がハンガリー社会に及ぼしたインパクトについて、主に言説研究の立場から自身の議論を展開する。

また、リストのことだけを研究しては、当時の状況を俯瞰する視座を得られないことから、ブームスやヨハン・シュトラウス、ヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ達へと考察の対象を広げ、彼らの「ジプシー風=ハンガリー風」な作品や演奏スタイルが、当時のハンガリー内外の「ジプシー音楽」をめぐる通念の形成にどのような影響を与えたかということについても調べる。またそれとは別に、1860年代以降のハンガリーの小説、「民衆劇 (népszínmű)」やオペレッタにおける「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」の描き方に対する、西欧の肯定的な「ジプシー音楽」観の影響についても考察したい。このように、ハンガリーにおけるリストの著書と作品の受容の問題を中心に、対象を「横に」広げる形で事例研究を積み上げていこうというのが、現段階における本研究の構想である。

4. 研究成果

二重君主国時代の「ジプシー楽団」の演奏活動について資料を集め、リストやヨアヒムのような芸術音楽の作曲家やヴィルトゥオーソ(名人)の肯定的な「ジプシー音楽」観が結果的に「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」という通念の定着に寄与したことを明らかにした。また、20世紀初頭の音源を参照することで、当時の「ジプシー音楽」の演奏スタイルが同時代のヴィルトゥオーソ達のそれとも部分的に重なる特徴を持っていたことをつきとめた。これらの成果に基づき、2016年6月にボストンの国際学会 (Joseph Joachim at 185) においてヨアヒムと「ジプシー音楽」の関係について発表し、一定の評価を得ることができた。この口頭発表の成果が近日中に論文として公開予定である。ヨアヒムについてはこのほかにもハンガリーの文化ナショナリズム運動との関わりについて研究を行い、その中で彼が運動との具体的なつながりを失って以降も「ジプシー音楽」を愛好し続けていたことを明らかにした。一方、フランツ・リストの著書『ジプシーとハンガリーにおける彼らの音楽』(フランス語原著は1859年、ハンガリー語訳は1861年)のハンガリーにおける受容の歴史についても、「ジプシー音楽」で使われる打弦楽器ツィンバロムのハンガリーにおける受容の話に絡めつつ、論文にまとめることができた。このほか、バルトークの創作活動に関する単著を書く際にも、「ジプシー音楽=ハンガリー音楽」という19世紀的通念について本研究で得られた知見を活かすことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

太田峰夫、ヨーゼフ・ヨアヒムとハンガリーの文化ナショナリズム、2015年3月、国民音楽の比較研究に向けて—音楽から地域を読み解く試み—(福田宏・池田あいの編著、京都大学地域研究統合情報センター) 21~27頁。

太田峰夫、音楽のナショナリズムとその周囲—ヨーゼフ・ヨアヒムとハンガリーとの関係を中心に—、2017年3月、『東欧史研究』第39号、106~111頁、東欧史研究会。

太田峰夫、『ジプシーとハンガリーにおける彼らの音楽について』(1859年)におけるリスト・フェレンツのツィンバロム観について
作曲家リストと19世紀後半の普及運動との関係を巡る—考察。2017年3月、『民族芸術』第33号、195~201頁、民族芸術学会。

〔学会発表〕(計 3件)

太田峰夫、音楽のナショナリズムとその社会的背景—ヨーゼフ・ヨアヒムと彼の親族の事例を中心に(=小シンポジウム「交錯する国民楽派と国民形成」の研究報告として)。2016年4月23日、東欧史研究会特別例会(東京・大正大学)

太田峰夫、Joseph Joachim and Gypsy Musicians: Their Relationships and Common Features in Performance Practice. 2016年6月16日、Joseph Joachim at 185 (Goethe-Institut Boston, Boston)

太田峰夫、ハンガリー民衆劇が1880年代の

ツィンバロムの普及に果たした役割について。2018年3月29日、2017年度日本スラヴ学研究会研究発表会(東京・東京大学)

〔図書〕(計 1件)

太田峰夫、バルトーク 音楽のプリミティヴィズム。2017年9月、慶應義塾大学出版会、280頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 峰夫 (MINEO OTA)

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：00533952

(2)研究分担者

特になし

(3)連携研究者

特になし

(4)研究協力者

特になし